



リンポー集落の識字教室では、4段階レベルのうち2段階目、「読み書きに不安がある」女性たちが学んでいた



「障害者の社会参加促進」プロジェクトのトレーニングを受けたスタッフは、必要に応じて担当する障害者の家を訪ねる

「ノートルダム女性の自立のための開発財団」が開発した識字教育用キット。識字教育参加者に無料配布される



FIELD SKETCH

真の平和は皆の社会参加から

フィリピンで経済的に最も貧しいミンダナオ島中部。長年続くイスラム反政府ゲリラと政府軍の戦闘は、住民から日常を奪い、命を危険にさらしてきた。JICAの支援を受け、この地に平和で尊厳ある生活をもたらそうと奮闘する人々をコタバト市に訪ねた。

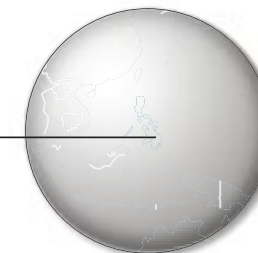
文 = 工藤 律子 (ジャーナリスト)

text by Kudo Ritsuko

写真 = 篠田 有史 (フォトジャーナリスト)

photos by Shinoda Yuji

フィリピン
PHILIPPINES



学びの中に未来が見える

南国らしいヤシの木の間に質素な木造家屋が並ぶ集落の中ほどに、簡素な小屋が立つ。中では、年齢もさまざまな30人前後の

女性が、識字ファシリテーター（授業の進行役）の問い掛けに、楽しそうに答えている。「家族とは?」「父親、母親、それに子どもです」「ではそれぞれの役割は?」。

首都マニラから飛行機で南へ約2時間、ミンダナオ島中部にあるコタバト市とその周辺では、NGO「ノートルダム女性の自立のための開発財団（NDFCAI WE D）」が中心となって、各地で識字教育プロ

ジェクトを実施している。地域の生活に根差した内容の教科書を用いて開かれる識字教室は、貧困層の女性たちにとって、読み書きを身につける場である以上の深い意味を持つ。

「ここで学んだおかげで、出稼ぎに行っている娘からの手紙を読めるようになりました。計算もできるようになったので、魚売りの商売も始めました」

そう話すピナンバイ・バラバガンさん（48）は小学校1年のとき、イスラム反政府ゲリラと政府軍の戦闘から逃れるために故郷を離れ、この町にきた。以来、生活に追われ、結婚後も17人の子どもを育てるのに

手一杯で、学校に戻ることができなかった。が、半年前、この教室に通い始めたことで生活が一変した。

地域の保育所でボランティアをするルシ

ーラ・フレンシー

リヨさん（62）も、

「教室に通うようにな

なって、物事の善

し悪しを自分で判

断できるようにな

りました」と胸を

張る。夢は「さら

に勉強して、地域

の子どもたちや家

ピナンバイ・バラバガンさんはイスラム教徒だが、イスラム反政府ゲリラと政府軍の戦闘のせいで、故郷を追われた



コタバト市の北、マギンダナオ州スルタン・クダラットのリンボ-集落にある識字教室と起業訓練用の小屋は、村人でにぎわう

字教育」と「起業訓練」に参加している。

互いを知ることが第一歩

「起業訓練」の一つ、学校の教室を借りて開かれた料理教室では、年齢も宗教も出身も異なる女性たちが、仲良くクッキーを作った。実演に挑んだのは、かつてコタバトを都に栄えたイスラム王国の王族の末えい、「ロイヤル・レディ」と呼ばれる女性の一人だ。彼女たちは今も、地元イスラム教徒の間で尊敬の対象となっている。が、経済的には決して裕福なわけではなく、また女性をあまり外に出さないイスラムの習慣のために、学校へ通ったことがなく読み書きができない人も少なくない。

「識字教室にも通ったんです。フィリピン人同士、皆で学ぶのは良いことですから」実演を終えたハツジャ・パイワ・アボ・ウランガヤさん(48)は気さくに語る。「ここで覚えたお菓子は友達にも好評で、それを売って自分でお金を稼ぐこともできるようになりました。あまりにおいしいので、私も自身も太っちゃいましたよ!」

「対立と偏見を乗り越える」ND F C A I W E D のプロジェクトは、NGOと行政、住民の連携プレーにより、コタバト市だけでなく、マラウイ市、マギンダナオ州の住民を含む計2000人以上に広まっている。同じく地元ネットワークを生かして成果を挙げているのが、「ハンディキャップ・インターナショナル(HI)」の「障害者の社会参加促進」プロジェクトだ。HIは、中部5州の地域ボランティア約100人、地域で活動する人道・開発支援団体の職員約50人、各地区(バラソングイ)の保健職員約60人に、障害者の心と体の状態を理解し、支援するためのトレーニングを実施。できるだけ多くの障害者が心身の医療ケアを受け、社会で活躍できるようにするための支援体制づくりを進めている。

料理教室には、「ロイヤル・レディ」をはじめ、イスラム教徒の女性も参加し、安価な材料で作れる料理を学んでいる

その長男(15)が輪タク(人力三輪車)をこいで家計を助けてくれるが、稼ぎは1日約200ペソ(約240円)。家族10人1日分のコメ5キロを買うだけで半分は消えるため、生活は苦しい。「それでも長男は私の勉強を手伝い、いつも励ましてくれます。あの子は、多くを学んでこそ良い未来を手にすることができると知っているんです」

「義足のおかげで、同僚に気兼ねせずに働けるようになりました。(6人いる)子どもたちには、戦闘にかかわってほしくないです」フィリピン一多様で複雑な社会背景を持つこの地域で、貧困にあえぐ人々が力を合わせ、平和な社会を築けるようになるまでには、まだ時間がかかるだろう。が、官民一体となった支援活動を通して、住民全員が生活の糧と知識、尊厳を手にし、自らの力で社会を觀察、分析できるようにすれば、それも不可能ではない。

「障害者は人前に出たがらないので、こちらからよく探さないと気付かないんです」彼に「発見」され、HIから義足を贈られた少女ファウジアさん(15)は、5歳のときに交通事故で左足を失って以来、恥ずかしくて学校へも行けなかった。昨年義足をつけて歩けるようになって初めて、自らの意志で小学校に入学した。その感想は「勉強できることが、とてもうれしいわ。世間には障害者をからかったり、哀れんだりする人が多いけれど、皆が義足



「義足を手につけられるようになれば変わると思う。」

や義手をつけられるようになれば変わると思う。」



人道支援団体職員アブドゥルバシット・タルソブさん(左)のおかげで、義足を手に入れ、笑顔を取り戻したファウジアさん

るまで、山奥で木の枝をつえに戦っていた。しかし、現在は武器を捨て、HIの義足をつけてコタバト市職員として働く。彼は言う。

「義足のおかげで、同僚に気兼ねせずに働けるようになりました。(6人いる)子どもたちには、戦闘にかかわってほしくないです」

「義足のおかげで、同僚に気兼ねせずに働けるようになりました。(6人いる)子どもたちには、戦闘にかかわってほしくないです」

「義足のおかげで、同僚に気兼ねせずに働けるようになりました。(6人いる)子どもたちには、戦闘にかかわってほしくないです」

ジョジョ・サンサルーナさん(中央)とその家族



「義足のおかげで、同僚に気兼ねせずに働けるようになりました。(6人いる)子どもたちには、戦闘にかかわってほしくないです」

「義足のおかげで、同僚に気兼ねせずに働けるようになりました。(6人いる)子どもたちには、戦闘にかかわってほしくないです」

FIELD SKETCH

NOTE

ミンダナオ中部の複雑な社会事情

ミンダナオ中部は、南北問題、民族問題、宗教問題、すべてを抱える地域だ。

国内一貧困層が多く(約60%)、識字率も最低(約70%)。おまけに多国籍企業による土地と資源の収奪が激しい。他地域からの移住者が多い一方で、独自の言語・習慣を維持する先住民も30以上あり、大半が貧農である。加えて、16世紀にはイスラム王国が建設され、現在も「ムスリム・ミンダナオ自治区(ARMM)」が存在するほどイスラム教の影響が強く、山岳地帯にはいまだに「モロ・イスラム解放戦線(MILF)」などの反政府ゲリラが潜み、政府軍と戦闘を続けている。

取材の舞台となったコタバト市は、人口の約半分がキリスト教徒、残りがイスラム教徒(ミンダナオ全体では約2割)。市政には政府と平和を結んだ「モロ民族解放戦線(MNLF)」関係者が多く参加している一方、経済は中国系移民を中心に動いている。

この複雑な社会事情が住民の相互理解を困難にし、政府の思惑と絡み合いながら平和を不安定なものにしている。



コタバト市の中心広場には、スペイン人の侵略を撃退した現地イスラム教徒の英雄、スルタン・クダラットの像が立つ